
彼女の異世界生活記

山崎空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の異世界生活記

【Nコード】

N9660Q

【作者名】

山崎空

【あらすじ】

それは、たった一通の手紙から始まりました。 差出人不明の手紙が届いたことで、不本意にも異世界に召還される羽目になった澄香。けれど呼び出された場所は人間が大嫌いな魔女のいる森で……。

それは全ての始まり、または原因。

* * *

ある日、姉から手紙が届きました。

外国に転勤になったという話を最期に、連絡が途絶えて二年。

最初の三ヶ月でおかしいと思い、会社に問い合わせた結果は、「向井静香は辞職しました」という言葉。

住んでいた部屋は引き払われた後で、手がかりになるようなものは何も残っていませんでした。

有体に言うなら、姉は行方不明になったのです。

姉は当時二十七歳。

もう親があれこれ口を出す年齢ではなかった事と、勝手気ままなところがある姉の性格を良く知る両親は、あまり心配はしませんでした。

実は、姉が行方不明になったのはこれが初めてではありませんでした。

小学生の時に二回。中学生に一回。そして高校、大学の時には有に六回も行方知れずになったのです。

小学生の時は、お小遣いだけでどこまで遠くに行けるか試したかったと、電車を乗り継いで4時間はかかる遠い街まで学校をさぼっ

て行き、その日の夜にパトカーで帰宅しました。

「帰りの電車賃がもったいなかった」パトカーから降りた姉の言葉です。

姉は両親に、休日一日かけてこつてりと絞られたのですが、本人は至ってけるつとしていたそうです。

二回目の時はお小遣いカットの上一、一週間は部屋に缶詰状態。それでも反省しない姉に、両親は早々匙を投げました。

中学生の時には、もう探し回る事ありませんでした。

ですが、その時は三日間行方しれずだったものですから、匙を投げたと言えどやっぱりまだ心配だったのでしよう、両親は警察に姉が帰ってこないことを相談しに行きました。

姉は結局、六日間行方知れずになりました。事件の可能性があることを四日目で示唆された両親は、目の下にクマをつくりながら姉を捜しました。

当の姉と言えば、七日目の朝に、何事もなかったかのように家に帰ってきました。

「とても素敵な所を見つけたから、親切なお婆さんに泊めてもらってしばらく過ごした」迷惑をかけた人達に謝るため、両親に引張られ連れまわされた後の、姉の言葉です。

私と姉は五つ違いで、六日間の行方不明事件当時私は小学生。

思えば、あの人の笑った顔以外の表情を私は見た事ありません。幼い私から見ても、姉は変わった人でした。いつも一人でいる印象が強く、同年代の親しい友人を作ると言う觀念が存在していないようにも思えました。

外見的には聞き分けの良さそうな、知的な人に見えます。顔も悪

くない方で、高校時代にはそれなりの数の告白も受けていたようです。

高校は地元から少し離れた私立を選んだので、姉の奇行を知る人があまりいなかったと言うのも、告白が増えた原因でしょう。

化粧をした姉は、正直美人でした。

姉は高校、大学と誰かと付き合っていたようです。ですが、それが誰で、どんな人なのかは知りません。

ただ言える事は、行方をくらます姉の悪い癖を知っても、許容できるほど心が広い人のようでした。

高校、大学と年をとるにつれ、行方知れずになる期間はだんだん長くなっていくようでした。ですが両親はもう気にもしませんでした。

「結婚すると思うよ」海外転勤云々で行方不明になる直前の、姉の言葉です。

私は何故か、この言葉が二年間の行方不明と関わっているような気がしてなりませんでした。

会社を辞職し、部屋を引き払い行方をくらました姉。そして結婚を示唆する言葉。

姉は誰かと結婚するために、行方不明になった。そして多分もう帰ってこない。その仮定は、もうずっと私の中にあります。

私と姉の姉妹仲は、悪くないものでしたがこれと言って良くもありませんでした。私たちは互いに興味がもてませんでした。姉の事に関して私はほぼ無関心で、時々気まぐれのように姉が語るのを、黙って聞いているだけでした。

さて、話を手紙に戻しましょう。

今私の机の上には一枚の手紙があります。真っ白い封筒の手紙です。住所と宛名は私のもので、差出人は静香、とだけ書いてあります。

すかしてみる限りでは、中に入ってる便箋は一枚だけのようです。

仕事から帰ってきたら、郵便受けにこの手紙が広告に挟まれるように入っていました。

宛名も見ないうちに、何故かそれが姉からだと思いました。何故かは説明できません。

ただ白い封筒から感じたのは、秘密めいた何かでした。姉が私にだけ教えようとしている何か。あければ、多分答えがあるのででしょう。

私は一階から持ってきた父の灰皿の上に手紙をかざし、同じく持ってきたライターで火をつけました。

炎はあっという間に白い封筒を中身ごと焼き、そして灰にかわりました。

手紙に何が書いてあったのか、もう答えは分からずじまいです。

ですが、それが姉が私に何かを教えるために送ってきたと悟った時点で、中身を見るという選択肢は私の中から消えたのです。

何故か？ ええ、何故でしょう。

私にもわかりません。

結果として残ったのは、灰皿の上の手紙のなれの果て。そして姉から手紙が届いたという事実。その二つのみ。

それをのぞけば、私の日常は昨日と変わりなく、そして明日も変わりないでしょう。

姉は行方しれずのまま、その原因も思惑も謎のまま。

彼女の日常と私の日常は、そうして永遠に交わらないまま。

それでいいと思うのです。

．．．他者による幕間01

それはある者にとっては悪夢であり、
またある者にとっては幸運である。

* * *

「消えた」

「は？」

結論だけを告げた幼馴染の顔を、彼は凝視した。

短いその言葉を理解するのに数秒を有した。言葉がいつも足りない
幼馴染はしかし、嘘だけは言わない。その事実が今は痛い。

何かの間違いじゃないのか。そう問い返せたらどんなにいいだろ
う。

「……それは、つまり失敗した、と言う事か？」

「そうだ」

きつぱりとした答えは、慰めも何も含んでいない。ただ事実だけ
を率直に彼に伝えてくる。

水晶玉を覗き込んでいた幼馴染が顔を上げた。何も言わずとも、
その目が「で、どうする？」と問いかけているのが分かった。

「失敗したなら、もう最後の手段しかないだろう……」

「やるのはいいが、成功するかどうかはわからんぞ？」

「お前の腕なら成功する。お前にできないなら、誰もできない」

数百年に一度の天賦の才と呼ばれた幼馴染に出来なければ、今の世に生きている人間の誰にも事はなしえないだろう。だからこそ、その言葉は誇張ではない。

「殺し文句だな」

幼馴染が薄く笑った。

「必要なものがある」

「用意してある」

「準備がいいな」

「できれば使いたくなかった」

「だろうな」

彼は懐から小さく切り取られた布を取り出して男に渡した。真っ白いその布の一部は、意図的に赤く染まっている。それを苦い表情で見守った。

使いたくなかったのは、嘘ではない。

しかし彼にはもう、それにすぎるしか道はないのだ。

布を受け取った幼馴染は、特殊な染料が入った袋を片手に持ち、部屋の床に大きな魔方陣を書き始めた。染料は、描く端から淡い光を放ち始める。

普段ならばその幻想的な光景を楽しめただろうが、今は心臓を鷲

掴みされるような焦燥が襲ってくるばかりだ。

魔法に関わるものにしか分からないだろう文様と魔法文字が、みるみるうちに部屋の床いっぱい広がっていく。

彼にはさっぱりと理解できないそれを、幼馴染は慣れた手つきで黙々と描く。

完成した魔方陣の中心に布がおかれ、用意が整うと幼馴染は振り返って彼を見た。

「お前は部屋の隅で祈ってる」

「ああ、そうするさ」

言われるまでもない。この件に関して、彼ができる事は何もないのだ。あとはただ祈るだけ。

それがどんなに歯がゆい事が、自分以上に分かる人間は多分ない。

それしか出来ないからこそ、彼は何よりも祈った。

どうか成功するように。

どうか彼女が助かるように。

そのために犠牲になる第三者に、彼は心の中で何度も謝罪を繰り返した。

幸運の影に不運があり、
不幸の影に幸せがある。

* * *

異変を、異変として受け取るには数秒時間が必要でした。

拝借した灰皿を元の位置に戻しに一階に降りた時、それは突然起こったのです。

始めは地震だと思いました。

床が小さく揺れる感覚がしばらく続き、そして大きな揺れが襲ったからです。どん、という音が聞こえるような気がするほど、大きな揺れでした。立っていることもできません。

転ばないようにしゃがんで、じっと揺れが収まるのを待ちました。そう、私は床をじっと睨んで、その瞬間を待っていたのです。

だからでしょう。異変を目の当たりにする事になったのです。フローリングの床が、最初は発光するように白くなりました。光というよりは、温度が高すぎて色のないマグマのような印象でした。それが履いていたスリッパを飲み込むのを、思わず息を止めて見

つめました。

侵食される。その言葉が一番その光景にあっていたと思います。白いそれは急激に体を上っていき、ぐるりと包み込むように私の体を襲いました。

何が起こっているのかは、その時になってもまだ理解できませんでした。

白い何かに包まれた私は、動けないまましゃがんでいました。やがて熱いこてを押し付けられたような激痛が足を襲って、その場に転がるまですつとです。

痛みが一瞬ならば冷静になれたでしょうが、足を襲った痛みは白い何かと同じように体を這い上がりました。当然の結果として、私は悲鳴をあげて辺りを転がりましたが、それから逃れる事はできないようでした。

外から感じる火傷した様な熱さと共に、体の内側も酷く痛みました。

僅かな間目に映った手の甲は、何かが這いずり回った後のように血管が浮き出て、破裂しそうなほど膨れていました。

痛いっ。助けて。

頭にはその言葉しか浮かんできません。

どうして自分がこんな目にあわなければならぬのか、まったく理解できないのです。抵抗する術も浮かばない私には、転げまわって少しでもその場から逃げる事しか考え付きませんでした。

大抵の人間は痛み弱い生き物です。訓練をした人ならまだしも、私には耐えられるものではありません。気を失えばもつと楽だったのですが、不幸にも私の意識ははっきりしていました。

痛みが突然終わったのは、それから少ししてからでした。気が狂わなかったのは、正直運が良かったとしか言いようがありません。

しばらくはその場で蹲って、ただ呼吸を繰り返していました。冷たい風が体を撫でていると理解してから、顔をようやく上げました。まだ震える手を地面に押し付けて、その場にゆっくり起き上がります。

そう、手の下にあったのは、フローリングの床ではなく草が生えた地面でした。辺りには崩れた石壁のようなものがいくつか散らばるようになり、それらを隠すように緑が侵食しています。

何かの遺跡のようにも見えるその場所に、私はぽつんと一人です。見慣れた家の中ではない事ぐらひはすぐに分かりました。

分かりましたが納得はできません。

こんな酷い目にあう様な事を、した覚えがないのですから。

いつもどおり同じように続くはずだった日常が、あっさりと崩されたその日。

思考が通常通りに復活した私は、まず真っ先に茜色の空に向かって叫びました。

思いつく限りの罵詈雑言を、喉がかわるまで何度も何度も繰り返して、ちよつと泣いて。

迫り来る夜のために木に登った私の判断は、間違ってたなかったと胸を張って言おうと思います。

．．．他者による幕間02

ある人は言った。

「絶望した」と口にできるうちは、まだ可能性が残されていると。

* * *

「……失敗した」

その一言は、彼を絶望の底に追いやるには充分だった。

途中までは成功するかのように見えただけにきつい。目の前が真っ暗になると言う言葉を実際に体験した彼は、部屋の隅に崩れ落ちるように座り込んだ。

「……正確には半分成功して、半分失敗した」

幼馴染の言葉に顔を上げる。「半分？」問い返せば無言の頷き返ってきた。

「召喚は上手くいった」

「でも、魔方陣の中に変化はないじゃないか」

「召喚場所がここにならなかったんだ」

「じゃあどこになったんだ？」

「ロンギルの森」

簡潔な返答は、しかし彼の救いの言葉にはならなかった。むしろ更に突き落とすものだった。

今度こそ、彼は両手で顔を覆った。希望が完全に断たれた。その事実が重く心に押し掛かった。

ロンギルの森は、彼にこの召喚を踏み切らせた原因が住処とする場所だった。彼の森に住まうのは、この国の建国前から生きているといわれる魔女。

残酷で気まぐれな魔女は、縄張りに立ち入る侵入者をけして許さない。

本当に絶望的だった。

森は目と鼻の先にあるというのに、その場所では彼らに手出しはできないのだ。そして召喚された者も、生きる事はできないだろう。

口を開けば幼馴染に当り散らしてしまいそうで、彼はぐつと唇をかんだ。

愛しい人を救う手段は消えた。後は彼女とその身の内に宿った小さい命がついえるのを、黙って見ていることしかできない。

部屋に横たわる沈黙は、どうしようもないほど残酷に、彼に重くのしかかった。

* * *

アルシアは瞬いた。

森の中心部に近い位置に突然現れた異質な気配をたどってきてもれば、予想に反してそこには何もいない。

気のせいではなかったはずなのに、何ともおかしい事だ。

この森の中の事で、アルシアに把握できない事などなにもない。ここで生きる獣達の息遣いすら、手の内である。

どこに隠れてもわからないはずがない。だと言つのに何もいない。見つからない。

おかしい事だった。こんな事は初めてだ。

アルシアはしばらく辺りを探って歩いた。

使い魔に任せるといふ選択肢はなかった。アルシアに分からない事が、彼らにわかるわけがない。

自分の足で何かを探すというのは、もしかしたら初めての事かもしれない。遺跡の辺りを見回し、茂みの中を探る。人の歩いたような跡があったから、侵入者は間違いなくいる。だというのに、いくらやっても場所がつかめない。目で見える限りも姿は見つからない。

侵入者を前に諦めると言つのは屈辱的な事だったが、見つからないものは見つからない。

この初めての事態にイライラして、近くにあった木を思い切り蹴った。一回だけでは腹の虫がおさまらず、二回、三回と蹴ったら、上から何かが落下してきた。

軽い音をたてて地面に落ちたそれは、金属製の髪飾りだった。大きさは、アルシアの手の平よりも小さい。華奢な作りのそれは、容易く握りつぶせそうだ。

髪飾りをしばらく眺めたあと、アルシアは木の上に目をやった。
そして、太い枝の間に挟まるようにこんもりと盛り上がった塊をみ
つけて 思わず、にやりと笑った。

順応力、それも或いは幸運と呼ぶべきだろう。

* * *

木の上で寝たというのに、夢の中は妙にふわふわしていました。

綿飴のような雲は、しかしべとべとではなくさらりとした感触。思わず飛び込んでしまいたくなるほど魅力的です。

夢の中なのだから迷わず飛び込んでしまえばいいのに、私は現実と同じように少しだけ迷って、結局雲の上にダイブしました。

ふうわり。私の体を受け止める雲の柔らかく優しいこと。

夢である事は分かっていましたから、このまま永遠に覚めなければいいのにも思いました。

けれど、神さまと言うのは意地悪なものです。

そう思った途端、目の前の雲は薄れて消えてしまいました。そし

て目を開けた私の目の前には 見知らぬ男の人の顔。

私は数回、瞬きを繰り返しました。男の人はなんだか楽しそうな顔で私の顔を見えています。

それから少しして、目が覚めた事に気がつきました。そして自分が木の上ではなくベッドに横になっているという事実にも。

「目が覚めた？」

男の人は瞬きを繰り返す私にそう言いました。

「はい」と答えると、「じゃあ起き上がりなさい」と言われ、手を差し出されました。

何故手を差し出されたのが良く分からなくて、私はまた数回瞬きました。

「寝ぼけてないで早くしなさい」

「あ、はい」

男の人の口調は、まるで子供を叱る親のようです。

咄嗟に返事を返して、その場に起き上がると彼はさらに怒りました。

「せっかくあたしが手を貸したのに、使わないで起き上がらないでよ！」

「すみません。ありがとうございます」

謝ってお礼を言って、そして男の人には不似合いな口調にまた瞬いてしまいました。

低い声に「あたし」という一人称は似合いません。まあ、でも世の中には「ぼく」「や」「おれ」という一人称を使う女性もいます。本

人の自由意志による事に、わざわざ口を出す野暮な人間にはなりたくありません。

「まあいいわ。貴女、ここがどこだか分かる？」

「知らない方の家の中です」

「……………じゃあこの家がある場所が、どこだかは？」

「寝る前の記憶が正しければ、知らない森の中でしょうか」

「どうして森の中にいたかは？」

「自宅で正体不明の光に襲われて、激痛にのたうちまわってる内に森の中に移動させられた感じでした」

「もうちよつと詳しく話しなさい」

男の人の言葉に従うまま、私はその時の状況を思い出しながら、できるだけ細かく説明しました。

地面が揺れたこと。光が体を包んだ事。足から頭のとっぺんまで、余すことなく激痛に襲われた事。血管が膨れ上がって浮き出ていた事。

話し終わると、男の人は呆れたような目で私を見ました。

普通に考えるとありえない話なので、嘘をついてると思われたのかと思いましたが、どうやら違うようでした。

「……………それ、血を媒介にした、界をこえる為の召喚魔法ね」

「召喚魔法？」

魔法なんて、本の中だけでしか見ないような単語です。

「異世界の人間を召喚する方法の一つよ。確実に個人を特定して召喚できるけど、そのためには召喚したい異世界人の名前と血、もしくはその血族の血が必要で、使う魔力も半端ないはずよ」

「血族の、血」

御伽噺を聞いてるような気分でしたが、その単語だけははつきりと頭に入ってきました。

血族。その言葉を聞いた途端、浮かんだのは何故か姉の顔。

「それに、この術式は召喚対象者と術者の間に、呼応と呼ばれる前儀式が必要な。それを無視して術を行った場合、召喚対象者は激痛に襲われるわけ」

「……………」

「そうなった対象者はたいてい気がふれるから、人間達は禁呪とか言って大分前に使わなくなっただけ。まだ使えるやつが残ってたのねえ」

気が触れなくて良かったなどと、男の人の解説をききつつしみじみ思いました。それにしても何故、私はそんなもののターゲットにされたのでしょうか？異世界なんて存在する事すら知らなかった所に、知り合いなんているわけがありません。

それに名前と、血族の血。

それらを踏まえると、何度考えても犯人は姉の顔になりました。ですが姉は魔法なんて使える人種ではなかったはず。それに、そんな酷い事をされるほど姉と仲が悪かった記憶はありません。

「寝てる間に殺してもつままないから、起きるまで待つてたけど」

考えにふけるわたしの前で、男の人はさらりと物騒な事を言いました。

寝てる間に殺してもつまらない？

それは……………それはどういう事ですかと、問おうとしても声が出ませんでした。召喚術とやらを丁寧に解説してくれた人ですから、なんとなくいい人なんだなと思っていた自分を殴りたい気分です。

世間話をするような軽い口調に背筋が寒くなりました。

つまり、殺すと言う言葉を軽く言えるほど、目の前の人物は危険な人種なのです。

一難去ってまた一難。なんて世知辛い世の中でしょう。

男の人は何かを考えるようにじっと私の顔を見つめました。

「貴女、ちょっと特異体質みたいだし、切り替えしが結構面白いし、頭悪そうにも見えないし」

気分はまるで蛇に睨まれた蛙です。

もしも結論が「やっぱり殺すわね」になった場合、せめて苦しまないように殺してくださいと頼むべきか迷う所です。

「名前は？」

「澄香です」

「スミカ？ 可愛くないわね」

「そ、そうですね？」

男の人の感性なのか、はたまた住む世界が違うからなのか。二十四年付き合ってきたものをすっぱりと切られ、思わず顔が引きつりました。

面と向かって可愛くないと言われたのは生まれて初めてです。なんだかちよびつとショックでした。

「私はアルシアよ。アーシアと呼びなさい」

「アーシア、さん」

「料理はどのくらいできるの？」

「…こちらの料理は知りませんが、元いた場所の料理なら人並みに

は作れます」

「パンは焼ける？」

「はい」

趣味程度になら、休日は何回か焼いた記憶があります。：ただし良く知る材料がそろっていれば、の話ですが。

この世界にはオーブンはなさそうな予感がします。窯で焼いた事はありませんが、人生当たって砕ければ何とかなるかもしれせん。

「いいわ。殺さないでいてあげる。今日からここに住みなさい。家事をしてもらうわ。そのかわり、森の外に出る事は許さない。逃げようとしたら首をはねるからそのつもりでいなさい」

「は、はいっ」

「早速食事を作ってもらおうかしら。台所と器具を説明するからついてきて。必要な材料は揃えてあげるから、貴女の作れる料理を作りなさい」

「はい」

「いい返事ね」

ベッドから立ち上がるうとした私に、男の人はにこりと綺麗に笑いました。それから幼い子供にするように頭を軽く撫でられました。

「順応力のある子は好きよ」

頭を撫でられるなんて久しぶりで、少しだけ涙が出ました。

いつの時代も、開き直る事が道を開く事もある。

* * *

「本当、スミカさんは運が良かったんですよ」

この世界の猫さんはおしゃべりです。いいえ、もしかすると彼女ともう一匹が特別なのもかもしれません。

それに、アーシャさんの家の猫さんはとても器用です。さっきお茶を飲む時も、尻尾で薬缶を持ってきてくれました。触らせてもらいましたが、別段普通の猫と同じ尻尾です。

毛足は短くスマートな猫さん達は、アーシャさんの使い魔なんだそうです。彼が二匹の猫を「下僕」と紹介した時のブーイングは、結構見物でした。

アーシャさんはこの森を住処とする偉大な魔女さんです。男の人でも魔女って言葉を使うのかは疑問ですが、とりあえずそれは胸のうちにとどめました。

アーシャさんの所で生活を始めてから、三週間ぐらいが過ぎました。

正確な日数ではなく、大体ですが。日々覚えることがいっぱい、加えて食事や洗濯や掃除におわれ、あつという間に時間は過ぎていきます。

寧ろやる事がいっぱいあったので、細かく色々考えることはありませんでした。

私の日常は概ね良好です。最初の頃は、パンを焦がして怒られましたが、今では窯のくせも把握して綺麗なパンが焼けます。

料理の味付けも、少し濃い目になりました。私自身は薄味が好きなんです、私基準だとアーシャさん曰く「味が無い」そうです。

材料は、知らないものあれば良く知るものもありました。調味料も同じような感じですよ。やっぱりオーブンや電子レンジ。ガスコンロはありません。

なくなってみて初めてありがたみを知るとは、よく言ったものです。

でもない状態に慣れてしまうと、それほど不便も感じなくなりました。

アーシャさんは大体自室か書庫に籠っています。食事の時に扉の外から呼びかけると、すぐに出てきてくれるので中がどんな風になつてるのかは知りません。

最初の頃は機嫌を損ねればすぐにリアルに首が飛ぶと思っていましたが、そんな事はありませんでした。失敗するともちろん怒られますが、特に暴力を振るわれるわけでもなく、大概すぐに許してもらえます。最近では怖いというよりも、何だか不思議な人だと思います。

今は食事が終わってお皿洗い中です。

二匹いるうちの二匹、女の子のティナちゃんが手伝ってくれてます。

最初のうちは、手伝うと言われても猫がどうやってと思ったものですが、今ではすっかり慣れてしまいました。

使い魔である彼女達は人の姿になれるんだそうです。いつもは猫の姿のままですが、洗い物の時だけ人型になって食器を拭いてくれます。

人の姿になったティナちゃんは銀髪に青い瞳の、お人形さんみたいに可愛い女の子です。

彼女と過ごすこのひと時は、私の中で密かに癒しの時間です。

この世界に引つ張り込まれた時の痛みには比べれば、猫が喋ったり人になつたりするのは可愛い事だと思います。私がいかに現状になじみすぎてるので、アーシャさんに「もう少し取り乱すもんよ、こつという時は」と諭されたほどです。

でも、取り乱したら取り乱したでアーシャさんに殺されてしまいそうな気がするのですが、その辺どうなんでしょう？

そう聞いてみて返ってきたのが、先ほどのティナちゃんの言葉です。

「まあ、運がいいとは自分でも思ってますけど」

「マスターが人間を館に招き入れるなんて、今までほんとになかったんですよ！ マスター人間嫌いですから、侵入者は問答無用で排除するし」

「……そうみたいですな」

実際それを目の当りにはしていませんが、この森に入る人間は、問答無用でアーシャさんが【狩る】そうです。

森と言っても、外に一番近い場所程度なら彼は何もしないそうです。狩の対象になるのは、アーシャさんが定めた線を越えてしまっ

た人達。

「どうしてその人達は、危険だと分かっている領域を侵すんですかね？」

「領域内には、人間達の間で高く取引されてる薬草がたくさん生えてますし、中央にある遺跡には古代の人間の宝が埋まっているという話ですから。マスターの怖さを知らない他所の国の人間が後を絶たないですよ」

「……………遺跡って、あの壊れた石壁ばかりが点在するあそこですか？ 何にもなさそうでしたけど…」

「ええ。宝なんてでたらめですよ。あそこには何にもありません」

だったらどうして教えてあげないんですかと言おうとして、止めました。新参者の私が口を出す話ではないと思っただからです。彼らがそれを外の人間に教えないのなら、それなりの理由があるのかもしれないし、逆に教えても入ってこようとするとするなら、それはもう仕方ありません。

「スミカさん、明日一緒にお散歩しませんか？」

「え？」

急な話の転換についていけず、そう問い返すと隣でティナちゃんがにこりと笑いました。

「リーネという花が、丁度見ごろなんです。群生してる場所なんてため息ものですよ！ 行きませんか？」

「え、でも、アーシャさんが森から出てはいけないうって」

「リーネの花畑は森の中です。それに森から出てはいけないうだけで、家から出るなどはマスターも言ってますし。私が一緒に行くんで

すから大丈夫ですよ」

「そう、ですか？」

そう言われてみれば、確かにそうだったような気がします。

いつの間にか私は、森の中どころかこの家から離れたら命がないと思っていたようです。

それに加えて、外にあまり興味が湧かなかったのもあったのでしよう

「……あの、じゃあ行きたいです。お願いします」

「ええ！ お弁当もって行きましょうね」

お皿を抱えてそう言ったティナちゃんに、私は笑顔で「はい」と答えました。

ピクニックなんて久しぶりです。

それにこんな可愛い子と一緒に散歩なんて、人生初です。もしかしたら一生なかったかもしれないと思うと、明日がものすごく楽しみになってきました。

ああ、でもやっぱり一応、アーシャさんに許可を取ったほうがいいかもしれないので、食器が全て片付いたら、彼の私室にいてみたいと思います。

予想に反してその部屋は、とても綺麗に掃除されていました。

物語に出てくる魔女は魔法使いの塔のように、怪しい実験道具やら本やらが散乱しているのを密かに想像していた私は、アーシャさんに気づかれないようにそっと息をはきました。

「戸口で立ち尽くしてないで、早く中に入んなさいよ」

「あ、はい」

慌てて扉を閉めて、アーシャさんがいる机まで歩きました。

部屋の壁には本棚がいくつも並んでいます。隙間なく並んでいる本全てが、辞書並みの厚さです。

本は机の上にも幾つか並んでいました。こちらはやや薄く、雑誌ぐらいの大きさです。

部屋の中は蝋燭が点いていません。それなのにとても明るいです。天井近くで光る球体は、電灯に良く似ていますが魔法なんだそうです。

机の近くまで行くと、椅子に座ったままのアーシャさんが「で、用は何？」と聞いてきました。

座っているせいで顔の位置が近い事に違和感を覚えつつ、私は本題をきりだします。

「明日、ティナちゃんとお花見してきていいですか？」

「花見？ ああ、そういえば今リーネが開花してるわね。ティナが誘ったの？」

「はい」

「懐かれたわね」

「はい？」

「いいわ。たまには洗濯以外で日の光を浴びてらっしゃい。じゃないとそのうちカビ生えるわよ貴女」

「生えませんか。……でもこの世界のカビってそんなに強力なんですか？」

「ここは異世界です。私の常識を覆すものがあってもおかしくありません。少し不安になって聞いてみたら、アーシャさんは答えの変わりに拳を頭にくれました。」

「……………痛いです。」

「昼食はどうするの？」

「あ、お弁当作って持っていくつもりです」

「貴女達じゃなくて、あたしの」

「…ですよ。ええと、私がお世話になる前はどなたがご飯作ってたんですか？」

「ティナか、レインね」

レインというのは、もう一匹の猫さんです。この子は男の子で、ティナちゃんと同じように人型になれるそうですが、私はその姿を見た事はありません。

「アーシャさんはお料理は」

「ゆでると焼くぐらいならやるわよ。消し炭にするのと粉々にするのは得意ね」

……………後半が物凄く料理に関わらない事のように思えたのですが、とりあえず笑って誤魔化します。

「…お掃除と裁縫はお上手ですよね」

実際、私が頂いた服は全てアーシャさんの手作りで、怖いぐらいサイズがぴつたりです。

お掃除も隅から隅までの徹底派なので、私がするといつもお小言を貰います。

「貴女よりはねえ」

……はい、すみません。

お裁縫、物凄く苦手です。初めて五秒で針を手に刺す粗忽者です。もう一度笑って誤魔化しつつ、何とか話を本題に戻します。

「…昼食は作り置きして置いておきますので、時間になったら用意だけレインくんにしてもらってください」

「ん、わかったわ」

これで明日はピクニックです。でもお弁当と朝食、昼食分を作らないといけないので、いつもより早く起きなきゃまずそうです。

「じゃ、失礼しました」

「ああ、ちよつと待ちなさいスミカ」

無事用件も話し終え、さあ部屋を出ようとした矢先、アーシャさんに何故か呼び止められました。

「何ですか？」と聞いてみましたが、彼は何も言わずに私の全身をじっと眺めています。別段おかしなところもないはずなのに、どうしたんでしょうか？

「アーシャさん？」

「ちよつと黙つて。今どこが一番いいのか考えてるんだから」

「は、はい」

条件反射的に返事をして、「どこが一番いいのか」が何を指しているのかさっぱり分かりません。ただ、考え事をしている時のアーシャさんは、邪魔しないほうがいいそうです。これはティナちゃん情報なので間違いないと思います。

アーシャさんはしばらく私の全身を眺めた後、結論が出たのか手招きをしました。その顔はとてもいい笑顔です。あまり良い予感がしないのは私の気のせいでしょうか。

恐る恐る近づくと、アーシャさんは私の右手を急につかんで引っ張りました。

当然私はバランスを崩し、もたついた足を立て直せないまま前のめりに傾いて彼にぶつかりそうになりました。その時です。

「きゅあつ?!?!」

がぶり。現実としてそんな音はしませんでしたが、聞こえたような気がしました。

アーシャさんが支えてくれたため、結果的に私は激突を免れましたが、そのかわりに首に噛みつかれました。いきなりです。予告なしです。口が開いて歯が見える瞬間がやけにスロー再生でした。

犬歯がとても尖っていたように見えたのは幻覚だと思えますが、とにかくホラーです。

アーシャさんはまるで吸血鬼のように私の首筋に歯を立てると、その場所をぺろりと舐めてから唇を離しました。時間にして凡そ数

秒の出来事です。

同時に支えてくれていた手も離れたので、私はその場に滑るようにしゃがみこんで
椅子の角に鼻をぶつけました。

「っ!」

とても、いたいです。低い鼻が更に低くなったような気がします。

「……………七十点」

頭上でアーシャさんの謎の呟きが聞こえました。
ななじゅってん。それって何の点数ですか。

「貴女ねえ、もう少しいい反応を見せないさいよ、いい反応を……
何、どうかしたの?」

「……………はにゃ、ぶつきゅえまひた……」
「……………」

顔を上げたら、すごく痛い子を見るような目とガツチリあってしまいました。今のは断じて私がどんくさいわけではなく、急に手を離れたアーシャさんに非があるはずです。

でもそんな事を言えるわけがありません。彼は家主であり、私はお情けでお世話になってる異世界人です。

「……………えっと、いい反応って、何のこと、ですか?」

ようやく鼻の痛みがひいてきた私は、その場に立ち上がりました。
ああそつえば、さつき首筋に噛みつかれたんだっけと思いつくと、急に噛まれた場所が痛むような気がします。

正直鼻をぶつけた痛みで、殆ど噛みつかれた事実がとんでました。

「……………もういいわ。今のはね、貴女に印をつけたのよ」

「……………印、ですか？」

「そう。はい、鏡」

「あ、どうも」

差し出された手鏡を反射的に受け取って、噛まれた場所を見ると、あら不思議。

そこにはどうみても歯形にみえない変なマーク……………トランプのダイヤのマークを少し複雑にしたような感じのものが、ペイントしたようにぺったり張り付いていました。

噛み付いただけなのに、なんと早業なことでしょう。

「貴女は特異体質だって、この間話したでしょ？」

「はい」

「この森の中にいて、あたしが把握できない個体が唯一貴女だけなの。原因は不明だけど、異世界人には特異な傾向がみられがちだから、そのせいでしょうね」

「……………へえ。そうなんですか？」

「その印は、貴女を見失わないようにする目印と同時に、この森にすむ獣達に対する警告でもあるわ。その印がある限り、スミカは捕食対象にはならないって事ね」

恐ろしい事をさらりと言うので、危うく聞き逃してしまう所でした。

そう、獣の存在がありました。

この森は人間が立ち入らないために弱肉強食のピラミッドが実にバランスよく保たれてるそうです。一番上にいるのももちろんアー

シャさんですが、その次が肉食の獣達で、彼らの獲物に人間も入ってしまうのです。

いえ、更に言うなら人間は全て侵入者として、狩りの最優先事項になるんだそうです。

この話を聞いた時、はじめの時によく出くわさなかったなど、自分の運のよさに胸をなでおろしました。

マークがあれば平気と言う事で、安心してピクニックにいけます。アーシャさんには感謝です。でも噛み付く必要性があったのは激しく疑問です。

「ありがとうございます」

「別に。言っただでしょう。目印なのよ、貴女が逃げ出した時すぐにわかるように」

お礼を言うとアーシャさんは片眉だけあげて居心地悪そうに言いました。その表情は私がお礼を口にするたびにみられるので、きつとお礼を言われ慣れてないせいだと思います。

そんなアーシャさんは少し可愛いと思います。が、もちろんそんな事言いません。私も命は惜しいです。

「貴女、元の世界に戻りたくないの？」

「え？」

その急な質問に、思考が対応するまで少しかかりました。

元の世界に戻りたくはないか。もちろん、戻れるものなら戻りたいです。

「戻る方法あるんですか？」

逆に聞き返すとアーシャさんは一瞬だけ口ごもりました。でも、本当に一瞬です。

「あるわよ。召喚術があるんだから、送還術だってもちろんね」

「へええ。すごいですね、考えた人」

「一番最初は術式間違いの事故で、偶然できた術だったらしいけどね。しばらくは一方的に呼び出す術ばかり研究されて、犠牲になった異世界人も何人かいるはずよ。そのうちの一人が元に戻る方法を探して、知識の賢者から送還術を買った、って言う話」

「御伽噺みたいですね」

「まあ実際御伽噺になってるわね」

話が一旦途切れました。

アーシャさんは心の中まで覗き込むように、私の目をじっと見つめます。

「元の世界に、戻りたいです。方法があるなら」

「あたしが今すぐ戻してあげるって言ったら？」

「……………即答で返事したいですけど、今すぐは駄目ですよ。明日テイナちゃんと約束がありますから」

「今すぐ。この機会を逃したら二度と戻してあげない、と言ったら？」

「……………約束は破りたくないです」

戻りたいのは本当です。急にいなくなった私に、両親はきつと心配してると思いますし、仕事だってほったらかしのままです。まあ、既に三週間無断欠勤なので、今ごろ席がなくなってるかもしれないかもしれませんが。

でもテイナちゃんとの約束を破りたくありません。せつかく誘っ

てくれた彼女を、裏切るようなまねはしたくないのです。

例え、帰ってしまったえば二度と会わないと言っても。

「冗談よ。今すぐは無理ね。準備もしてないし」

重くなりかけていた空気が、その一言で軽くなった気がしました。知らずほっと息をはくと、アーシャさんは私の頭を数回撫でました。

「それに、あたしも貴女の事結構気に入ってるの。タダでなんか帰してあげないから。良く覚えておきなさい」

この言葉には、お礼を言うべきかどうか迷いました。

気に入ると言う言葉は嬉しかったのですが、何を要求されるのか、が激しく気になる所です。

当面は今ままでおり、この生活が続くんだと言う事はわかりました。そして私が、それを嫌だと思っない事も。

リーネの花は、スズランに良く似た花でした。

違う点は大きさと、色でしょうか。リーネの方がスズランよりも花弁が大きく、色は淡いクリーム色です。

大きな葉っぱの影に隠れてつましく咲くスズランとは違い、リーネの花は威風堂々と葉っぱの上に顔を出し、風に揺れて、その香りを辺り一面にふりまいています。

群生する様は本当に見事です。そう言えば、最近は見慣れた花見になんて行ってませんでした。小さい頃なら家族で何回か行きましたが、この年になると社内旅行やイベントで花を見るくらいです。

花の色と淡い緑は、目だけでなく心にまで優しい感じがします。

花畑の前に立ち止まっていると、前を歩いていたティナちゃんが振り向いて笑いました。片付けや料理を手伝ってくれる以外で、彼女が人型になつてのを見るのはこれが初めてです。

麗しい彼女が花畑に立つと、まるで完成された絵画のようで、知らずため息が漏れます。

「スミカさん、呆けてると転びますよ」

「大丈夫ですよ。ティナちゃんこそ、よそ見して歩くと大変ですよ」
「それこそ心配無用です！ 私身軽ですから」

猫は確かに身軽ですが、人型でもそれは適用されるようです。羨ましいことです。日々の運動不足がたたって、お世辞にも身軽と言

う言葉を使えない私としては、ティナちゃんの姿は眩しいばかりです。

「綺麗ですね。こんな綺麗な光景、久しぶりに見ました」

「今の時期だと見所はこのリーネの花ぐらいいですけど、他の季節はもっと華やかな花がたくさん咲きますよ」

「この光景だけでも充分ですよ。ティナちゃんが誘ってくれてよかったです」

「リーネの花は毒性がありますが、見る分には問題ないですからね」

そう言えばスズランにも毒性がありました。

姿かたちが似ると、そんな所まで同じになるのでしょうか。

「毒が強い所は花と根です。スミカさんは危険ですから触らないようにしてくださいね」

「そんなに強い毒なんですか？」

「個人差はあると思います。まあ激しい嘔吐と頭痛からはまず逃れられませんね。運が悪いと人は死ぬみたいです。マスターの印は獣避けにはなりますけど、毒素とかはどうにもなりませんから」

私達にはたいして効きませんが。そう言っただけでティナちゃんはおもむろに手袋をはめて、群生するリーネの花を五、六本摘むと腰に下げている布袋の中にしまいました。

「マスターに、ついでに採取するように言われたんですよ」

私が不思議そうな顔で見ていたからでしょう、ティナちゃんは手袋の花が触れた面を内側にして、元のように懐にしまいながら言いました。

「アーシャさんは、何に使うんですか？」

「薬の調合に必要なだと言ってますよ。何の薬かは聞いてませんけど」

「……毒薬でしょうか」

「薬の調合はマスターの趣味みたいなものですから、なんとも。出来上がった薬が実用された例は殆どないですね。作る過程が楽しいそうです」

「あ……それ、何となく分かります。料理と一緒にですね」

「スミカさんのはおいしいですけど、マスターのは棚の瓶が増えるだけです」

それから二人で同時に吹きだして、しばらく笑ったらお腹が好いてきたのでお弁当にする事にしました。

日陰が丁度良くできている木の下に陣取って、あらかじめ持ってきておいた敷物を敷いて準備は完了です。

ピクニックらしくバスケットの中にはサンドイッチとお茶が入っています。

棚の中に入れておいたアーシャさん達の昼食も似たような感じですが、あちらはお茶ではなくスープを作っていました。

本当、こんなわくわくする昼食は、小学校の遠足以来でしょうか。童心に返ったような気分のまま、私とティナちゃんは近くの小川で手を洗って、バスケットの場所に戻ってきました。

お日様はばかばかでそよ風も心地よく、なんだか元の世界にいる時よりも幸せな気がしてしまいます。

元の世界に不満があったわけではありませんが、私にはこのぐらゐのスローな生活が丁度いいのかもしれない。

来る時は散々な目に会いましたし、もう一度あれを味わえと言わ

れたら全力で拒否しますけど。

そこまで考えて、姉の事をちらりと浮かびました。

姉もこの世界にいるのでしょうか。もしいるのだったら、一度だけで良いので会いたいです。心配をしているとかそういう感情で会いたいのではありません。ただ、聞いてみたいことがあるのです。

この森から出る事ができない私には、姉の情報を調べる事もできません。が、アーシャさんならもしかしたら、何か知ってるかもしれません。

帰ったら聞いてみようと思いつつ、私はタマゴサンドに口をつけました。

* * *

「レーイン、お腹すいたんだけど」

「分かっていますよ今スープ温めますから！ もう少し待ってくださいってさっきから言ってるでしょ」

「先にサンドイツチ食べるわよ？」

「駄目ですよ！ それ僕の方も入ってますからね！？ マスターの手にかかったが最後、全部なくなるじゃないですかっ」

「やーね。あたしそんな事しないもん」

「かわいい子ぶるのは似合わないからやめてください」

スープの入った鍋の前で一人憤る使い魔を尻目に、アルシアは既にテーブルに並べられていたサンドイッチに手を伸ばす。

人一倍食べる彼のためにか、大き目の皿には所狭しとサンドイッチが並んでいる。二人分にしては充分な量に見えるが、彼にしてみれば少し足りないくらいだ。

それを見越してかスープが入った鍋も巨大、具材も多めだ。

これに加えて朝食と弁当分を作ったのだから、スミカは一体何時に起きたのだろう。

彼女がこの館に住むようになってから、断然変わったのが食生活だ。

最初はこげていたパンも、今は焦げていない。薄すぎて味がなかったのも、一度文句を言ったら次からは丁度いい味になった。

スミカは賢い。そして順応性が高い。

水がしみこむように彼らの生活に溶け込み、今では違和感などなくこの森の住人になっている。そういえば、アルシアの口調に初対面で何か言わなかったのは彼女が初めてだ。

だから気に入った、というのもある。切り返しは早いのに内容と反応が微妙なのも面白い。けれどそれが時々不満でもある。

たまには普通の女らしい反応というのを見てみたい。

キヤーキヤー煩い女は嫌いだが、スミカは別だ。もう少し慌てたりとか騒いだりとか、不安そうな顔をするとか可愛らしい反応があってもいい。

だいたい、異世界に来たというのに元の世界に帰りたいたいというそぶりをまったく見せない人間も珍しい。希少種ものだ。

「ちよつ、マスター?! 静かになったと思ったら何先に食べてんですか?! っていうかもう最後の一個なんてありえないですよ!!!」

「……………あら？」

レインの声に我にかえれば、大皿に山のようにあつたサンドイッチは残り一つ。しかもアルシアの手はそれをしっかりとつかんでいる。

考え事をしている間にも無意識に食べていたらしい。

「酷い！！ 今日のサンドイッチ、せつかくスミカさんが僕の好きな具揃えてくれたのに！！！」

湯気をたてたスープを持ってきたレインが、テーブルの上の空の大皿をみて泣きそうな声をあげた。

「……………そういえばタマゴサンドと鳥肉の照り焼きサンドが割合多めだった気も……」

といつつ、最後のサンドイッチをぱくり。途端にあがった悲鳴は綺麗に無視する。この館では彼が法律。使い魔のものは主である自分のもの。

それにしても、使い魔の好みを聞いて、主であるアルシアの好みを聞かないとは無視しがたい事実である。スミカが帰ってきたら少し説教をしなければならぬ。彼女が気にかけるべきは使い魔たちではなく自分だ。

(……………あら？)

サンドイッチを租借しつつそう思い、ふと何かがおかしい事に気がつく。けれど何もおかしいことはない。だからこそおかしいのだ。

少し考えてみたけれど結果は変わらず、もやもやした何かを抱え

たままアルシアはサンドイッチを完食した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9660q/>

彼女の異世界生活記

2011年11月16日21時49分発行